

私立中学校 2018年度入試予測

2017年度は約20%の生徒が中学入試に臨み、その中で私立中の受験率はアップが続き、大学入試改革への不安感もあり、私立の中高一貫校がますます支持を集めており、その一方、大学付属校の人気も上昇がみられます。首都圏の受験動向をチェックし、2018年度入試で「成功」を収めるための作戦や受験プランを考えていきましょう。

私立中の「期待値」高まり、上位校・人気校は激戦模様

ここ数年、首都圏（1都3県）では私立中学校をめざす「中学受験熱」が徐々に高まっています。

2008年のリーマンショック以降の経済情勢や、少子化などの影響を受け、私立・国立中学校の全体の受験者数（私立が主体）は2015年度まで減少が続いていました。しかし、2016年度からやや増加に変わり、この2年間で約1000人増。2017年度は約4万6500人となりました（大手塾の推計）。

これに公立中高一貫校（1都3県）を加えると総受験者数は約6万1900人にのぼり、中学受験率（実受験者数÷小学校卒業生数）は約20%と推計され、首都圏ではほぼ「5人に1人」が中学入試に臨んでいます。

一方、下がり気味だった私立・国立中の受験率（私立が主体）も2015年度からアップに転じて、2017年度には15.9%に上昇しました（前年度15.4%）。

こうした数値が示すように、私立中の人気は全体的に上向いているのです。その要因の一つに、大学入試改革（2021年度入試から）があります。

「大学入学共通テスト」が始まり、それに記述式を導入（国語・数学）、英語では民間の英語試験も採用。そのほか私立大入試をふくめ合否選考の「あり方」も検討されています。この新制度の大学入試に直面するのは現・中3生以降です。

そのため、大学入試への対応力が確かな私立中がより「期待値」を高めているようです。また、「未知数」の大学入試を警戒し、私立中の大学付属校へ流れる動きも出ています。

さて、来春の2018年度には小学校卒業生数がかかり減少します（約8200人減）。ですが、中学受験熱のアップによって、「私立中の総受験者数は2017年度とほぼ同じか、若干増える」と予測されています。

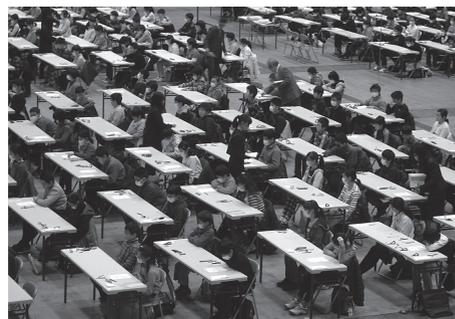
なかでも、難関・上位校や、大規模な学校改革で注目度を上げている学校などは厳しい「競争入試」が続くでしょう。各自の志望校に合った対策学習を、気を引きしめて進めていきましょう。

埼玉、千葉などの1月入試 栄東に最多の受験生集まる

首都圏の私立中入試（一般）は、埼玉県では1月10日が開始日、千葉県は1月20日から始まります。

これらの1月入試で「試し受験」をしたり、押さえ校（すべり止め）を確保したうえで、本命の2月入試（東京、神奈川）に臨むのが受験プランの基本形です。その一方、最近では「地元志向」も強まり、1月校を第1志望とする埼玉、千葉の受験生も多くなっています。

おもな1月校の受験動向などをみてみましょう。埼玉県では、ここ数年、栄東が「超マンモス入試校」となっています。2017年度に同校は5回の



試験を行い、合計の受験者は9441人（前年比752人増）にのぼりました。とくにA日程は群を抜く大規模入試で、受験者5832人（前年比838人増）。この倍率は前年から横ばいの1.3倍。特進クラス選抜の「東大I（特待）」では受験者1369人（同398人減）、倍率は前年の2.9倍から2.4倍にややダウン。「東大Iは合格者全員を特待生とする」、「A日程でも特進の東大クラス合格を出す」といった特長的な制度は、2018年度にも継続されます。

開智では、特待・特進クラス選抜の「先端A」で受験者が35人減少（1061人→1026人）、合格者が絞り込まれ倍率は1.8倍→2.0倍に上昇。それ以外の3回の試験はいずれも受験者が増え、1回では134人増（865人→999人）、倍率1.5倍→1.7倍とやや上がりました。2018年度には「先端特待」（合格者全員が特待生）を新設します。

立教新座の1回は、受験者の減少傾向にあったのが2016年度に急増に転じましたが、2017年度は23人減（1557人→1534人）。倍率は2.1倍→2.0倍とわずかにダウン。

また、浦和明の星女子の1回では受験者4人減（1899人→1895人）。合格者が多めに出され、倍率は2.0倍→1.9倍と若干下がりました。淑徳与野の1回も受験者は微減（5人減）、倍率は前年と同じ1.8倍に。

千葉県の私立中入試は、最近、埼玉県に比べると小規模な受験状況となっています。2017年度に千葉の1月入試の延べ受験者数は約1万7000人、埼玉ではその人数は約3万2000人でした。

入試の開始日が千葉では遅く、また埼玉までの交通（電車）の便が良くなったこともあって、東京などの「試し受験」層が千葉から埼玉へかなり流れているとみられます。

ひと頃まで受験者3500人台の「マンモス入試」といわれた市川の1回も規模は縮小。2017年度にこの受験者は2597人（前年比82人減）、倍率は男

子枠では前年と同じ2.0倍、女子枠は2.5倍→2.6倍と若干の上昇。

昭和学院秀英の2回一般も、受験者は61人減（1153人→1092人）。倍率は3.3倍→3.0倍とやや下がりました。2018年度には「初日」（1月20日）の午後「新入試」（2科）を導入します。

一方、県内最難関の渋谷教育学園幕張の1次では受験者111人増（1852人→1963人）、倍率は2.4倍→2.7倍にアップ。2016年春の東大合格者数が全国5位（前年春は8位）に上がったことが影響したようです。

東邦大付東邦の前期も受験者93人増（2239人→2332人）、倍率は2.0倍→2.1倍に。なお、同校は12月に推薦（単願）を新設し、その受験者は635人（合格30人）で21.2倍もの高倍率でした。

常磐線の沿線では、ここ数年、専修大松戸に「勢い」があります。同校では1回（185人増）、2回（93人増）とも受験者がかなり増え、倍率は1回2.0倍→2.5倍、2回4.1倍→5.2倍に上昇。

茨城県では、県内トップ校の江戸川学園取手は3コース制の募集で、1月中には試験を2回実施。受験者は1回で104人増（820人→924人）、2回も102人増。ただ合格者が多めに出され、倍率は1回2.2倍→2.3倍、2回1.9倍→2.0倍と若干の上昇にとどまりました。

寮がある地方の学校の「首都圏会場入試」も1月の「選択肢」です。2017年度は早稲田佐賀、土佐塾（高知）、早稲田摂陵（大阪）、西大和学園（奈良）、佐久長聖（長野）、秀光（宮城）、盛岡白百合学園（岩手）、函館ラ・サール（北海道）など約20校が1月に首都圏入試を実施。これら受験者は合計で約9300人（非公表の学校を除く）でした。

2月入試の受験動向は？ 大学付属校で人気アップも

東京都、神奈川県私立中入試は2月1日に開始され、5日ごろでほぼ終了します。上位校を中心に受験状況をみていきましょう。

【男子校】2017年度に、男子御三家などでは、麻布で受験者が53人増加（894人→947人）、開成（11人増）も増えました。麻布の倍率は2.3倍→2.5倍とややアップ。

駒場東邦では受験者75人減（589人→514人）、武蔵（13人減）もやや減っています。駒場東邦は2年連続の減少で、倍率は2015年度の2.4倍から2倍を切って1.9倍までダウン。2018年度はやや

反動が出るとも予測されます。

神奈川の**栄光学園**は受験者が79人増え、倍率は2.3倍→2.7倍に上昇。2017年春の新校舎完成が「追い風」になったようです。かたや**聖光学院**は近年の難化でやや敬遠されたのか、1回(58人減)・2回(65人減)とも受験者が減っています。

ほかの上位校はどうでしょうか。進学学校のなかで受験者が増えたのは、**世田谷学園**(1次21人増・2次66人増・3次33人増)、**桐朋**(1回28人増・2回33人増)、**逗子開成**(1次14人増・2次34人増・3次58人増)など。**世田谷学園**はここ数年、受験者数のダウン傾向にありましたが、アップに転じました。

大学付属校では、**明治大付中野**の受験者が目立って増加(1回103人増・2回98人増)。同校の倍率はとくに1回で2.3倍→3.1倍と上向きしました。校舎や施設の建て替えが2017年度中に完了することがプラス要因の一つでしょう。

早稲田大高等学院中学部(30人増)、**早稲田**(1回12人増・2回49人増)でも受験者が増えていきます。**明治大付中野**の“躍進”や早大系の受験者増は「付属校人気の高まり」ともみられます。なお早稲田は併設大学に内部進学するのは約半数という「半進学校」です。

また、豊洲の新校舎に移転した**芝浦工業大附**も人気アップ、受験者は急増しました(1回81人増・2回87人増・3回70人増)。

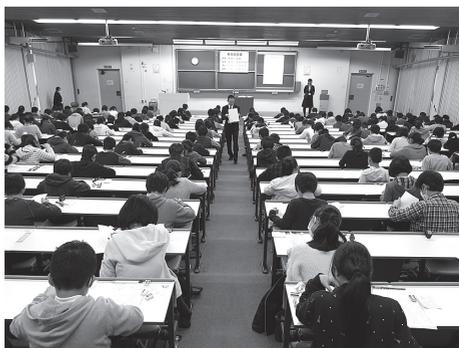
一方、**早稲田**へ受験生が流れた部分もあったのか、レベルや地理的に近い**海城**(1回40人減・2回58人減)では受験者が減っています。

近年「ダウン」傾向にある**巣鴨**は、I期(34人減)・II期(65人減)ともに受験者減。ただ2018年度はIII期を新設し、その分I期、II期では定員を削減するため「難化」の可能性があります。

【女子校】2017年度に、女子御三家では**桜蔭**の受験者が22人減り(523人→501人)、**女子学院**も21人減少(673人→652人)、**雙葉**は微増(7人増)でした。倍率は、**桜蔭**(1.9倍)、**雙葉**(3.0倍)はほぼ前年並みで、**女子学院**は2.5倍→2.3倍とやや下がっています。

レベルで御三家と肩を並べる**豊島岡女子学園**の1回は受験者10人減(1009人→999人)、倍率は前年と同じ2.5倍でした。同校では2・3回も受験者減(2回24人減・3回18人減)ですが、2・3回ともに8.4倍と高倍率であり、2018年度も「狭き門」が続くでしょう。

受験者が増えたのは、**横浜共立学園**(A63人増・



B34人増)、**鎌倉女学院**(1回42人増・2回54人増)、**立教女学院**(42人増)、**学習院女子**(A16人増、B39人増)、**田園調布学園**(1回12人増・2回46人増・3回23人増)など。これらの倍率はそれぞれ上がっています。**横浜共立学園**ではA1.6倍→1.9倍、B3.7倍→4.2倍とアップ。

「共学志向」によるものか、ほかの女子校では「ダウン」となったところが目立ちました。

なかでも、**吉祥女子**(1回56人減・2回91人減・3回122人減)、**洗足学園**(1回75人減・2回59人減・3回109人減)では前年の反動もあって1~3回とも受験者の減り幅が大きくなりました。倍率は、**吉祥女子**で1回2.3倍→2.0倍、2回3.1倍→2.4倍、3回13.0倍→6.8倍と下がり、**洗足学園**もすべての回で緩和しています。

このほか、**大妻**、**頌栄女子学院**、**東洋英和女学院**、**普連土学園**、**富士見**、**品川女子学院**、**跡見学園**、**実践女子学園**などが全回の試験で受験者減となり、倍率もこれらのおお半で下がりました。

しかし、2018年度にはこれらの学校のなかで、受験生の「揺り戻し」が起きることが予測されます。2017年度よりも高めの倍率を想定しておくのがよいでしょう。

【共学校】2017年度に大学付属校のなかでトップレベルの**慶應義塾中等部**は、男子枠の受験者が121人減り(801人→680人)、女子枠は27人増え(320人→347人)、倍率は男子枠で5.2倍→4.3倍に下がり、女子枠は5.5倍→6.2倍にアップ。

また、**青山学院**でも男子の受験者が微減(3人減)、女子は増加(24人増)と分かれ、倍率は男子3.1倍→2.8倍、女子4.7→5.1倍と女子で上昇。

これらのほかにも、大学付属校で「受験者が男子は減り、女子は増えた」という学校(**中央大附**、**成城学園**など)がありました。「女子校から共学の付属校へ」と女子が流れたともみられます。

一方、**早稲田大系属早稲田実業学校**はほぼ前年並みの受験者数で、倍率は男子枠3.2倍、女子枠3.5倍でした。**慶應義塾湘南藤沢**では受験者32人減、倍率は4.4倍→4.2倍とややダウン。

「付属校の人気アップ」で目立ったのは**明治大付中野八王子**です。1・2回(A方式)の受験者が急増(1回72人増・2回119人増)し、新設されたB方式(4科総合型)も多くの受験者(354人)が集まりました。倍率は1回1.7倍→2.9倍、2回3.2倍→5.7倍、B方式15.4倍と厳しくなっています。**明治大付明治**でも1・2回とも受験者が増えました(1回29人増・2回33人増)。

前年(2016年度)に共学化した**法政大第二**は人気で、受験者はさらに増え(1回90人増・2回106人増)、倍率もとくに2回で高まっています。

一方、共学のトップ進学校・**渋谷教育学園渋谷**は1~3回とも受験者減(1回8人減・2回93人減・3回96人減)。倍率は1回3.8倍、2回3.1倍、3回8.2倍でいずれも低下。2018年度は2・3回で反動(受験者増)が出るかもしれません。

午後入試の併願も大規模で 2月は「短期決戦化」続く

2月の東京、神奈川では「午後入試」が多くの中堅校などに普及しており、午後も使って併願の幅を広げる受験パターンが定番化しています。また埼玉でも「初日」(1月10日)などに午後入試の実施校がかなりあります。

2月入試では、とくに1日、2日に午後入試が盛んであり、2017年度には2月1日だけで約1万8300人が午後入試を受験しました。これは同1日午前受験者(約3万6900人)の半数近くにのぼります。

そのなかで、例えば、**東京都市大付**は1日午後受験者928人が集まっています。**清泉女学院**では初めて午後入試(1日午後)を行い、この受験者は270人でした。

2018年度には、**三輪学園**が2月1日に午後入試を導入し、**桐蔭学園中教**、**桐蔭学園**はこれまでの2日午後に加え、1日午後にも新設します。

さて、午後入試の広がりも影響し、近年の2月入試では「短期決戦化」の傾向が強まっています。2月1、2日の「前半戦」で合格をゲットして、「3日以降の試験は受けたくない」という生徒がかなり増えているのです。

そうした風潮に合わせ、学校側では1日や2日の合格枠を広げて、3日以降の「後半戦」で合格

者を減らす動きが出ています。

元々、3日以降は試験を行う学校数や定員が「前半戦」(1、2日)に比べて少なく、そのため上位校などは倍率や合格レベルが高くなりがちです。とはいえ、「後半戦」もうまく活用したいものです。

1月中や2月1、2日でしっかりと合格を確保。そのうえで、3日以降にさらにレベルの高い学校にチャレンジ受験といった「積極策」も考えておくといえでしょう。

女子校で3校が共学化 新タイプの入試も広がる

2018年度入試の主な変更点などを挙げておきましょう。

共学化を行うのは、**文化学園大杉並**(女子校)、**八雲学園**(同)、**青山学院横浜英和**(同)です。それと共に**青山学院横浜英和**では3回の試験すべてが2科・4科選択から4科のみに変わります。

先にふれましたが、**巣鴨**ではIII期(定員40人)を2月4日に新設し、2月1日・2日のI期・II期の定員を各120人から各100人に減らします。

ほかに入試日程では、**鎌倉学園**、**カリタス女子**が2月1日午前の試験を新たに実施。

一方、試験教科では、算数のみの「1教科入試」を**品川女子学院**が2月1日午後、**大妻中野**は同3日午後にも新設します。

ここ数年、英語を取り入れた入試の実施校が急速に増加(2017年度は約90校)。2018年度には、例えば、**共立女子**で「インタラクティブ入試」を2月3日午後を導入。ゲームや対話などで英語力を測る「英語インタラクティブトライアル」(100点満点)と基礎的な「算数」(50点満点)で合否が選考されます。

大学入試改革(2021年度)への対応策として、「思考力」型試験の導入も近年、目につきます。「思考力型入試」を2018年度に新設するのは、**跡見学園**(2月4日)、**実践女子学園**(同)など。

また、公立中高一貫校の出題形式に合わせた「適性検査」型の試験は、大学入試改革の趣旨にも沿うもので、多くの私立中(2017年度は100校以上)に広がっています。2018年度は**中村**(2月1日)、**日大豊山女子**(同)、**日本大**(2月5日)、**西武学園文理**(1月20日)などで「適性検査型入試」を新設します。

これらの新タイプ(英語、思考力、適性検査型)の入試が自分の能力や特性に合っている場合は、併願プランに加えてみるのも一策です。